

主 題：新しい人生を生きる ②

聖書箇所：Iヨハネ2章15節

イエス・キリストの恵みによって救われたクリスチャンは新しい人生を生きるために生まれ変わった者であるということを前回学びました。これまでの生き方とは違う、新しい生き方をする者として私たちは生まれ変わり、そのような人へと神様が造り変えてくださった、それが救いなのだと聖書は私たちに教えてくれました。ですから、あの十字架を見上げ、救い主イエスの復活を覚える時、パウロはこの方のためだけに私は生きて行こうという結論を引き出しました。そしてパウロは、あなたも同じように生きましようと呼びをなしたわけです。

私たちは前回、新しく生まれ変わった人はどんなふうに生きるのか、つまりクリスチャンの新しい生き方について学びました。繰り返しますが、そのように生きたから救いに与るのではないのです。救われたからこのように生きるとパウロは教えます。そしてみことばは、神様があなたを罪から救い出してくださり、新しいいのちを与えてくださったとするならば、あなたはこういう生き方を実践しているはずだと教えるのです。

A. 神を愛する

あなたは神を愛する人に生まれ変わった。

B. 神を信頼する

あなたは神を信頼する人へと生まれ変わった。

C. 神を恐れる

主はあなたを神を恐れる人へと新しく生まれ変わらせてくださった。

前回、この三つのことを示し、私たちは「神を愛する」ということを見ました。そして神様が私たちにどんな愛を望んでおられるのかということをお我々が知るためには、私たちの模範であるイエス様を見ればよいわけです。

1. 喜んで主のために犠牲を払う

主イエス・キリストを見る時に、父なる神ご自身が我々にどのような愛を期待しておられるかがはっきりします。主イエス・キリストが十字架に架かってご自身のいのちを捨ててくださったという犠牲を見る時に、主は犠牲の伴った愛を当然望んでおられるわけです。神が望んでおられる愛は、私は主を最も愛するから、私のすべてのものはもちろん主のものだけれども、私のすべてのものをもって神を愛そうとする、喜んで主のために犠牲を払おうとする、犠牲を伴った愛だということを見て来ました。

2. 喜んで主のみことばに従い続ける

もう一つ我々が見たのは、主イエス・キリストが父なる神のみこころに従順に従われたように、喜んで主のみことばに従って行こうという愛でした。なぜなら主イエス・キリストが父なる神を愛しておられ、そのような形で愛を示されたように、私たちも同じように父なる神のみことばに、みこころに従いながら生きることによって私たちの愛を示すことができる。そういう愛を神は期待しておられるし、そういう愛をもって神を愛する者、生きる者へとあなたも私も生まれ変わったのです。これは別の人の話をしているのではなく、イエス様をお信じになっておられるあなたの話です。信仰、救いというのは、神があなたをそういう人に造り変えてくださったということです。

ですから、もし私たちのうちにこういった歩みが生まれていないとするならば、我々はその信仰自体をもう一度吟味する必要があります。救いは神が与えてくださるものであり、そしてこの救いをいただいた者はこういった人へと神ご自身が造り変えてくださるということです。きょうお集いの兄弟姉妹たちは、間違いなく心から主を愛して、主に喜んで従って生きておられると思います。主のみこころに従って行こうと強い願いを持って歩んでおられると思います。でももしかしたら、この中のだれかはただみことばを聞くだけで終わってしまっているかもしれない。皆さんが思い出さなければいけないことは、あなた自身が新しい歩みを始めるために、神はあなたを新しい人に造り変えてくださったということです。新しい人生を生きて行くために、新しい歩みをするためにあなたは生まれ変わったのです。救われたというタイトルをもらっただけではないのです。あなたが救われた人として生きて行くようにと、神様はあなたを生まれ変わらせてくださった。大切なのは私たちが救われた者にふさわしく生きて行くということです。

そしてある人は私の信仰者としての歩みは非常に不忠実であり、不信仰であったと思うかもしれない。そのように神様があなたに示してくださっているのだったら、罪を悔い改めて、また歩み始めたらいい。

また失敗したらまた悔い改めて、また歩み始めたらいい。そうやって我々は生きるのです。悲しいことにこの地上において罪との闘いが続きます。失敗の連続です。感謝なことは神が我々を赦し続けてくださることです。新しい人へと私たちは生まれかわったのです。

☆ 「主への愛」 Iヨハネ2:15

◎ 主への愛を学ぶことの大切さ

実はきょう私たちは、前回から見ているこの「愛」についてもう少し見て行きたいと願うわけです。確かに既に学びましたが、この学びをすることが非常に大切であると確信します。なぜ愛することについて学ぶことが必要なのか、二つの理由を言います。

① あなたの救いを確認できる

一つは、神への愛を学んで行くことによって、あなたが本当に生まれ変わっているかどうか、言い方をかえればあなたが救われているかどうかを確認することができます。悲しい現実、どこの国にあって教会には救われていない人々がたくさんいます。一番悲しいのは救われていると信じていながらそうでない人々がいるという現実です。だから私たちは救いが確実に自分のものであるかどうかを吟味しなければいけない。愛する皆さんが、だれひとりとしてこの救いから漏れることがないように我々は望むわけです。ですから、神に対する愛を学ぶことによって、あなたの救いがはっきりします。

② あなたの歩みを確認できる

二つ目に、あなたが生まれ変わった者として、それにふさわしく歩んでいるかどうかの確認ができます。というのは私たちは神を愛していると言うかもしれない。でも問題は、神が喜んでくださっているかどうかです。自己満足であってはならないのです。なぜなら神はこのような愛をもって私を愛しなさいと言われた。それにふさわしいお方です。問題は私たちがそのような愛をもって愛しているかどうかです。神を愛することについて学ぶことによって、神が望んでおられるように私たちが神を愛しているかどうか、そのことを知ることができます。

きょうのテキストはIヨハネ2:15です。そこには「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」と記されています。まずヨハネは主に対する心からの愛、つまり神様があなたに期待しておられる愛とはどういうものであるかというのを教えています。このみことばを見ると、その愛というのは世を愛さないものであると。神があなたに望んでおられる愛というのは、神だけを愛するものであって、世を愛するものであってはならないと言っているのです。それがヨハネがここで教えることです。しかもこの15節には「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません」とあります。これは命令形です。神様はただ望んでいるのではない。このように神様があなたにも命令しておられるということです。このような警告を神様はあなたに与えてくださった。世にあるものを愛してはならない、この世を愛してはならないと命令・警告を与えておられます。

このみことばには、「もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」と非常に驚くべきことが記されています。この後半で世を愛している人は救われていないとヨハネは言うわけです。世を愛している人は実は救われていないと言うのです。私はイエス様を信じると決心した人が世を愛しているならば、その人は救われていませんと聖書は言うのです。我々がどう思うかではないのです。救ってくださる神様がどう言われるかです。恐らく皆さんはそれをお聞きになって、自分の信仰はどうかと思われるかもしれませんが。なぜなら残念ながら、我々は救われていながら世からの影響を受けているからです。ここで「世を愛している」と現在形を使っています。なぜかという、その人の特徴を明確に記しているのです。ここに言われている「世を愛している」人というのは、ずうっとそのような状態にあり続けている人のことです。この人は世が好きでたまらないのです。世を愛するというのはその人の特徴なのです。その人はそのように生き続けていると言うのです。神様のことよりもこの世が大好きで、この世を愛し続けていると。聖書はそういう人は救われていないと言うのです。

◎ 「世」の意味

なぜ神様はこの世を愛することをそこまで忌み嫌われるのか——。それを知るために、ここに記されている「世」というものはどういうものなのかを正しく理解する必要があります。「世」ということばには、三つの意味があるということをぜひ覚えておいてください。

① 創造された世界

一つ目に「世」というのは神が創造されたこの世界のことを言います。神がお造りになったすべての被造物を「世」と呼びます。

② 人類

二つ目にこれは私たち人間です。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」と、私たち人間を指しています。神様は人間を、あなたを愛してくださっていると。

③ サタンに支配されたこの世の中

三つ目の意味は、まさにここで使われているサタンに支配されたこの世の中という意味です。詳しい説明をする必要はないかと思います。確かにこの世界には悪がはびこっています。聖書はこの「世」を支配しているのがサタンであるということを教えます。Ⅰヨハネ5：19に「私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。」とあります。「悪い者」とはサタンです。全世界はサタンの支配下にあると言うのです。そしてヨハネはそのことをヨハネの福音書の中に三度繰り返して教えています。「この世を支配する者は追い出される」(12：31)、「この世を支配する者が来るからです」(14：30)、「この世を支配する者がさばかれ」る(16：11)と、「この世」を支配する者が存在していることを教えています。サタンのことです。

だからこの世は信仰者であるあなたを憎むのです。だからこの世はあなたに反発するのです。それが証拠にイエス様がこの世にお見えになった時、世の中は歓迎せず、イエスを拒み、イエスを十字架にはりつけにしました。イエス様がそのことについて「もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。」(ヨハネ15：19)と言われた。この世を支配しているのはサタンです。ですからサタンに逆らうあなたをこの世は放っておきません。この世はあなたを憎むと言うのです。この世はサタンの支配下にあるのだということを覚えておいてください。そのようにみことばが教えます。

◎ サタンの野望：神になる

もう一つ私たちが学んでおきたいことは、サタンがどういう野望を抱いているかです。サタンは一体何を成し遂げようとしているのかです。

イザヤ14：13-14にバビロンの王の墮落とサタンの墮落と言われている箇所が出て来ます。「：13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。：14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』」と。この「いと高き方」というのは神のことです。つまりサタンは被造物でありながら、神によって造られた天使でありながら、自分自身を創造主なる神様の上に置こうとするわけです。自分が神になろうとしているのです。彼は被造物でありながら創造主なる神としてすべての人に崇拜され、すべての人から仕えられることを望んでいます。そのために彼はあらゆるものを用いて人々を惑わし続けるのです。

この世にはたくさんの宗教が存在しています。しかし、一体だれを崇拜しているのかを考えると、創造主なる神でないものを崇拜するということ、つまり偶像を崇拜するというのはサタンを崇拜しているということです。多くの人々が真理から離れて、創造主でないものを崇拜しています。サタンはそうして人々を惑わし続けます。

サタンが影響を与えるのは、文化、教育、書物や音楽、映画、テレビの番組など、さまざまなものを巧妙に使いながら人々を惑わし続けます。クリスチャンの音楽を聞いているならともかく、そうでない音楽を聞いて、そうでないテレビの番組を見て、映画を見て、それから得るものは一体何でしょう？それを見て、それを聞いて私たちの信仰が強められることがあるのでしょうか？かえってそれらは聖書が教える生き方と全く違う生き方を私たちに勧めます。例えばアメリカのテレビを見ていても、もう何十年前からですけども、方向が変わってきました。驚くべきことは、さまざま悪霊や魔女を題材にするような番組がどんどん出て来て、しかも恐ろしいことにそういった番組を世の中が受け入れるということです。

だれが見てもこの世の中は悪い方向に進んでいます。世の中の悪はますます増大しています。聖書はこの世界を支配しているのはサタンだと教えてくれます。そしてサタンは多くの人々を惑わし続けようとしていると言うのです。サタンはあらゆるものを用いて人々の心を自分に向けさせようとし、彼は今も人々が彼を崇拜し続けるようにと熱心に働き続けています。人々の関心を自分にだけ向けさせて、自分だけに仕えるようにと働き続けています。そのことを今皆さんもよく見ているはずで、

少し考えたいのは、サタンは主を信じていない人たちだけに働くのかということです。答えはノーです。イエス様を信じているあなたのうちにもサタンは間違いなく働くのです。サタンは、主イエス・キリストを信じて救いに与ったクリスチャンであるあなたに、神様に向いているあなたの関心を神から彼自身の方に向けさせようとするわけです。そのように誘惑することによって、あなたが持っている神への純粋な愛や従順な歩みに悪い影響を与えようとしています。サタンはクリスチャンであるあなたが神のために生きないように、神の栄光を現わさないようにと、忙しく、熱心に働き続けているのです。

そういうサタンの働きを見て来ると、「この世」というのは次のように定義することができます。「この世」とは、主なる神に対する愛をあなたから奪うものです。ですから信仰者であるあなたが世を見始めて、少しでも世を愛して行くことによって、主に惜しみなく犠牲を払うことにも主のみこころに服従す

ることにも、徐々に熱意を失って行きます。だから世を愛してはならないと言われます。我々信仰者がみずから問いかけなければいけない質問は、私はこの世を愛していないかどうか——。このことを我々ひとりひとりみずから問いかけてみる必要があると思います。

◎ 「サタンが用いる戦術」 I テモテ 4 : 1

今サタンがさまざまな誘惑をなすというお話をしたのですが、もう少しサタンがどんなふうに入々のうちに働くのか、ぜひ知っていただきたい、みことばの教えがあります。サタンが用いる戦術、あなたが「この世」を愛する人となるために彼が用いる戦術というのは惑わしです。サタンはいろいろなことをもってあなたを惑わします。I テモテ 4 : 1 で、パウロはサタンが何を用いてあなたを惑わそうとするかを教えています。「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」、この「信仰から離れる」というのは、もともと信仰がなかったということです。信じた人がその信仰を捨てるという話ではないのです。信仰がなかった人々が信仰がなかったことを明らかにするということです。今私たちが見たいのは、ここに出て来る終わりの時代になるとサタンがさまざまな方法で人々の心を惑わすということです。「惑わす霊と悪霊の教えとに」とあります。だれがそのような誤った教えをするのでしょうか？人間がそのように誤った教えをするのです。サタンは人間を使って、人々がこの真理に至らないようにと邪魔をするのです。

・「バルイエス（魔術師）を用いた」 使徒 13 : 6－10

聖書の中にそのような話が記されています。パウロたちは地中海の島キプロスに行きました。そこには神のことばを聞きたいと思っていた地方総督がいました。名前をセルギオ・パウロと言いました。ところがセルギオ・パウロとともにいたバルイエスという人物、彼は魔術者でした。この人物は魔術を行ない、セルギオ・パウロが主イエスを信じるのを妨げようとしします。使徒の働き 13 : 6－10 にその話が出て来ます。8 節に「信仰の道から遠ざけようとした。」と出て来ます。この魔術を行なう人物は、セルギオ・パウロが救いに与ることを何とか邪魔しようとしていたのです。そこでパウロは聖霊に満たされた後、彼をにらみつけて「ああ、あらゆる偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。」（13 : 9－10）と言うのです。この人物はこういう働きをしようとしていたのです。恐らくこの前にもしていたのかもしれない。サタンはこういう人を使って人々がこの福音に来ないようにと妨げをなします。

・「偽りのクリスチャン」を用いた マタイ 13 : 24－30、41－43

また別の方法があります。それは教会において偽りのクリスチャンを用いるのです。マタイ 13 章の中でイエス様がよい麦と毒麦の話をされました。特にマタイ 13 : 24－30 でその話をされ、36－43 でイエス様がその説明をされています。ここで二つのことをお教えになりました。主の働きに対するサタンの妨害は現実の問題で、神の働きがなされる時には必ずサタンの働きがなされ、必ず主によるさばきが来るのだということが教えられています。神に逆らう者たち、サタンに従う者たちには永遠の地獄が待っていることを教えています。

マタイ 13 : 41 に「人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、」とあります。「不法を行なう者」というのは不正や違反行為をなす者たちです。こういう人たちに対して神様の審判が下るのだと言うのです。また、この中で「つまずきを与える者」という人がどういう人かです。「つまずきを与える者」というのは「わな」とか「おとし」という意味を持っています。「おとし」というのは鳥などを捕まえる仕掛けのことです。わなを仕掛けて動物や鳥を捕まえるということです。このことばの意味は、人に罪を犯させる、つまり罪へ誘惑する者であったり、また罪、不信仰、背教、堕落への誘惑、その原因や起因となるものです。ですからこの「つまずきを与える者」というのは、特にクリスチャンたちが罪を犯して行くように、神様に背いて神様に逆らい続けて行くように、そういったことをなす働き人なのです。この人たちは信仰者であるあなたが道徳的に、また霊的に堕落することを目論んでいます。道徳的に間違ったことを皆さんに勧めるのです。どちらかという、このことに対して我々は自分を守ることができます。例えば盗みを働くだとか、人をいじめるとか、暴力をふるうとか、性的に汚れたことに私たちが走って行く、そういった時にちょっとそれはおかしいと多くの信仰者は感じるのです。みことばを学んでおられる皆さんはそれは聖書の教えと違うということにある程度気づきます。

問題なのはこういう道徳的な誘惑ではなく、霊的な誘惑です。というのは判断が非常に難しいからです。しかしサタンはこういった霊的な誘惑をもって、働き人を使って皆さんの主に対する愛や信頼を弱らせようとしします。皆さんの目を主からほかの方向に向けさせようとするのです。彼らは皆さんにそんなに熱心にならなくてもいいじゃない、あなたは主を信頼していると言うけれども、もっと現実的にならないとって、皆さんの目を主からほかの方向へ向けさせようとする。本来我々が主のみことばに喜んで従おうとしているならば、それこそひとりひとりが見習わなければいけない模範です。ところが

こういう人々が、主に対して献身的な生き方をしている者を嘲笑って、そうでない方向に皆さんを進ませようとするのです。

＜例：「人の悪口」 ヤコブ 4：11＞

一番わかりやすい一つの例を挙げましょう。それは私たちのことばによる罪、悪口です。人に対する悪口に対して聖書は非常に厳しく教えています。ヤコブ 4：11に「兄弟たち。互いに悪口を言い合ってはいいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。」とヤコブが教えています。互いに悪口を言い合ってはならないと教えるわけです。なぜそれが問題か——。よくご存じのように、そうやって教会の中にいろいろな分裂が出て来るということを多くの教会が経験しています。ヤコブはここで、あなたは人をさばいていると警告しているのです。そして人をさばくことができるのはただひとり、神だけだと言うのです。あなたはみずからをその地位に置いていると言うのです。そのことをヤコブはここで厳しく非難します。教会というのは、主イエスの愛をいただいた者たちが、偉大な主の愛を互いに愛し合うというはっきりと目に見える形で示すところです。教会というところは、主イエスの赦しをいただいた者たちが、その偉大な主の赦しを互いに赦し合うというはっきりと目に見える形で示すところであるはずで、神が備えてくださった赦しがどんなにすばらしいものなのか、それを我々は互いに赦し合うことによって実践するわけです。主が愛してくださったその愛がどんなに偉大なものであるか、我々は愛し合うことによって示すのです。もし私たちがだれかの悪口を言っているのであれば教会の存在目的に反します。なぜなら悪口というのは、その話の対象の人の評判を落とすことが目的だからです。そしてそれは主からいただいた新しいご性質に反する歩みなのです。

考えてみてください。私たちはかつてはそういった中を生きていたのです。人の悪口を言いながら生きていたのです。そういう人々の中を歩んでいたのです。私たちはそこから救い出されたのです。新しくされた者として私たちがこれまでと同じように人々の悪口を言っているのだったら、新しくされた者にふさわしくない生き方であるとみことばは我々に教えるわけです。なぜこういう悪口を言っている人と話をすることが問題かという、悪口を言っている人は自分が罪を犯しているだけではない。あなた自身にも同じ罪を犯させようとするのです。

＜対処 ルカ 17：3＞

だからもしだれかがだれかの悪口をあなたに言いに来たとしたら、その人に愛を持って「あなたがしていることは間違っている」と伝えるのです。黙ってはいけません。黙っていたらその人はあなたがその人物に同意したと思います。イエス様はルカ 17：3で「**気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦し**」てあげなさいと言っています。だから兄弟が罪を犯していたら愛を持ってそれは間違っているということを伝えなければいけないということです。具体的に言うと、もしそういう人がいたら、「兄弟、あなたのやっていることは間違っている。もしだれかがあなたに対してひどいことをして、それに対してあなたが怒って悪口を言っているのだったら、あなたはその人と連絡を取って会い、その問題を解決することです」と言わなければいけない。そして望めば私は喜んであなたについて行きましょうと。正しく神様にあつて解決するようにと。私たちはいろいろなことが起こる中であつて、神の前に正しく解決して行こうとするのです。それしか神様の祝福を得る方法はないです。

パウロはガラテヤ 6：1で「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」と書いています。みことばはどうしたらいいのかちゃんと正確に、またわかりやすく教えてくれています。皆さん、我々信仰者はひとりひとり神の前に喜ばれることを行なうて行きたいという願いをしっかりと持つことです。神様、私はあなたの前に喜ばれることを行なうて行きたい、助けてくださいと。そして、神様を愛している人と交わることです。だから教会というのは、霊的な人たちをリーダーに選んでいるのです。教会には執事や長老がいます。何のために彼らがいるのか——。そういう人たちと交わることがあなたにできるからです。そうしてもちろんそうでない霊的な人たちもたくさんいる。そういう人たちと交わるのです。一緒に主を見上げるのです。一緒に主を賛美するのです。主をたたえるのです。霊的な人々というのはどれだけのことを知っているかではないのです。どのように生きているかなのです。

◎ あなたはこの世を愛していませんか？

さて私たちはきょう主への愛について学んで来ました。どんな愛を持って私たちは主を愛するべきなのか、そのことを教えられました。我々が問わなければいけないことは、あなたは「この世」を愛していないかどうか。もう一つ付け加えると、「この世」を愛するということは一日にしてならないということです。徐々にそのような人へと変えられて行くということです。気をつけていないと、すぐにそういう

ものは私たちの心に入り込んでしまって、気がついたらいつの間にかそういったものにどっぷりついている可能性があります。恐らく皆さんもいろいろな趣味がおありかと思えます。皆さんにとってとても好きなことがあると思います。大体私たちが本当に好きなことを持っている場合、そのためだったらどんな犠牲を払いとわないというのが私たちではありませんか？例えばそのためだったらどんなに朝早く起きても構わない。余り朝早く起きない人でも、その日だけは特別に起きるとか。そのためだったら、どんなに夜更かししても構わないとか。またそれをするためにどんなに遠いところであったとしてもそこに喜んで出かけて行こうとする。また何か自分の趣味のために一生懸命勉強する人もいます。そのために喜んで金銭的な犠牲を払う人もいます。自分の愛することのためだったら喜んで積極的に犠牲を払おうとします。趣味や娯楽が罪だと言っているのではありません。言っているのは、そういったものが偶像になり得るという話です。私たちが見て来た「この世」というのは、あなたの神様に対する愛を奪って行くものであると。あなたの主に対する熱心な奉仕を、主のためになす犠牲的な奉仕や捧げ物を奪って行くものであって、「この世」というのは巧妙に皆さんのうちに働いて、かつて持っていた主に対する献身的な愛を段々あなたから奪い、あなたの愛が冷めて行くように働くのです。

ひとりの人の魂の救いよりも自分のひいきしているチームの勝敗に関心があるのだったら、世の中を愛していると言えませんか？主イエス・キリストはそのために来られたのです。主イエス・キリストはそれのためにご自身を捨てられたのです。もし私たちがひとりの罪人が悔い改めること、それよりもほかのことが自分の関心であるならば、正しい愛を持って神様を愛していると言えます？主のために奉仕することよりも自分の趣味に時間を費やしているのだったら、世を愛していると言えませんか？主とのディボーションよりも、主のみことばを学び、主と祈り、その交わりを持つことよりも自分の趣味の方が楽しいとするならば、この世を愛していると言えませんか？主のおことばを聞くよりも、終わってからの自分の予定に関心があるのだったら、この世を愛していると言えませんか？主イエス・キリストの愛を知りたければみことばが教えます。主イエス・キリストの愛を知りたければ十字架が明らかにします。私たちが考えなければいけないのは、その主に対してどのような愛を持って私たちが主を見上げているかです。どのような愛を持って主を愛しているかです。

◎ 主の愛にこたえた人たち

1934年に、中国の福建省で若いアメリカ人のカップルジョンとベティ・スタムが3カ月の女の子を残していのちを落としました。彼らはこのイエス・キリストの福音を伝えるためにアメリカから中国に出て行ったのです。妻の見ていた前で、夫は鋭い刃物でもって首を切り落とされました。同じ日に妻も同じように殺害されました。彼らの人生は無駄だったのでしょうか？彼らは主を愛して、主のために喜んで自分のいのちを犠牲にしました。そうして彼らの主に対する愛を明らかにしたのです。生前、妻であるベティ・スタムはある人の家を訪問しました。彼女の訪問を受けたひとりの女性は、非常に彼女から感銘を受けました。そして彼女も私も宣教師になって主のすばらしい福音を伝えたいという願いを持ちました。そして後に彼女と彼女の夫は南米エクアドルに出かけて行き、あのアウカインディアンというまだ人々と接したことのないジャングルに住む人々とコンタクトを持ちます。ジムとエリザベス・エリオットです。ご主人のジム・エリオットはそれ以外の4名、トータル5名の宣教師とともにいのちを落とします。インディアンに殺されました。ある時ジム・エリオットは「自分のいのちを守るために必要とあればあのアウカインディアンを銃で撃ちますか」という質問を受けるのです。その時に彼は、「私は主にお会いする備えができていたが、彼らはできていません」と答えたそうです。そして彼らはこのインディアンたちに倒されました。彼らの人生は無駄だったのか——。いいえ、このインディアンたちがイエス・キリストの救いに与るのです。

先ほどお話ししたエリザベス・エリオット、彼女はベティ・スタムの訪問を受け、自分も宣教師になろうと決心した人物です。その人がこんな祈りを記しています。最後にそれをご紹介します。

主よ、私は私のあらゆる計画も生きがいも自分自身の願いも希望も捨て去ります。

そして私の人生のために備えられたあなたのみこころを受け入れます。

私は私自身を私のいのちを私のすべてを永遠のあなたのものとなるために、完全にあなたに捧げます。

私をあなたの聖霊で満たし、封印し、そしてあなたのみこころのままに私を用いてください。

みこころのところに私を遣わしてください。

私の人生においてあなたの完全なみこころをなしてください。

いかなる犠牲が伴おうと、今よりとこしえに。

彼らは一体なぜこんなことをしたのでしょうか。彼らは主を愛していたのです。彼らは主を愛し喜んでこの方のために自分のいのちを捨てようとしていました。そんな愛を神様はあなたや私に期待しておられる。なぜなら私たちは私たちのために創造主なる神がいのちを捨ててくださったのを見たのです、信じたの

です。あなたも私もそんな愛で神を愛する者として生まれ変わったのです。主イエス・キリストがペテロに「あなたはこの世のあらゆるものより私を愛するか」と質問をしました。この質問は我々ひとりひとりに問うてみななければいけないのではないですか？神はあなたを愛してくださった。あなたが神を愛するかです。兄弟姉妹の皆さん、この世を愛していませんか？あなたの関心は半分ぐらいこの世に向いていませんか？あなたの願い事は神様だけに向いています？さまざまなものでサタンはあなたから愛を奪って行こうとします。気をつけなければいけないのです。そしてひとりひとりがしっかりと主を見上げて、「私はどのような愛をもってこの主に答えていくのか」と自分に問いかけてください。

答えてください。「あなたは私を愛しますか？」

《考えましょう》

1. 「この世」とは、どういう意味ですか？
2. 「この世を愛する」ことを、具体例を挙げて説明してください。
3. 「この世を愛する人」は、「御父への愛がない」とヨハネは言いました。その意味を説明してください。また、その理由を記してください。
4. 「つまずきを与える人」の説明をしてください。このような人との正しい接し方について聖書は何と教えていますか？